

まち・みち交流実践論

開講科目名	まち・みち交流実践論	講義題目	お遍路コミュニケーション		
単位数	2単位	授業形態	実習科目	開講言語	日本語
開講科目名(英)	Practice Theory of Community Communication				
時間割コード	360426				
定員	8人				
担当教員	森栗 茂一、西川 勝、板倉 信一郎、宮本 友介				
対象所属・年次	全研究科、全学部、社会人（若干名）				
開講区分・曜日・時間	1学期=集中				
開講場所	現地				
キーワード	お遍路、歩き、コミュニケーション、観光				
授業の目的・概要	(1) 歩き道とコミュニティとの交流を、お遍路のお接待や景観、人と人、人と風土に則して学び、体感する。 (2) お遍路のインバウンド観光に展開する可能性を、世界遺産化も含めて理解し、その展開を検討し、必要に応じて世界遺産事業を学び、理解する。				
学習目標	・ 歩き道とコミュニティとの交流を、お遍路のお接待（※）や景観、人と風土に則して、体感し、現場力とコミュニケーション力を向上させる。 ・ お遍路のインバウンド観光に展開する可能性を、世界遺産化も含めて体感し、その展開について現場で体感する。 ・ お遍路体験を自己の研究生活、日常生活、市民生活のなかで反芻し、体感をスケッチ的に切り取り、生活学的手法を体得する。				
授業計画	第1回 4/10（金）第6限 オリエンテーション 事後参加者を決定する 全学教育推進機構ステューデントコモンズ2階マッチング型セミナー室 第2回 4/21（火）第6限 四国遍路とお接待の意味、受講動機の共有化 第3-10回 4/29（祝）-5/2（祭）12時頃、鳴門西PAバス停からすぐの、道の駅第九の里 集合 宿坊、 遍路接待宿等を宿泊する。吉野川沈水橋、遍路ころがしを踏破予定 第11-12回 5/26（火）第6-7限 お遍路ふりかえりワーク 第13回 6/2（火）第6限 世界遺産と多言語表示 第14-15回 未定 まちなかにおいて、市民・こどもとのお遍路対話に参加する				
授業外における学習	・ 事前に、ブログを読み、オリエンテーションの準備に備える。準備の整ったもののみ、履修を許可する。（8時間） ・ 連休中における集中時の予約、遅れの予測、異常事態への備え等について、準備・対処する（2時間） ・ 日頃からまち・みちに関心を持ち、なぜ遍路について感心をもったのかを、論理的に説明する準備をする。（5時間） ・ 遍路や道に関する対話の場に参加する。（その機会については授業でアナウンスを行う）（5時間） ・ 道の駅を核とした遍路を活かした地域づくりに関心を持ち、調べ、参与観察する。または、記録を整理				
履修条件・受講条件	学生教育研究傷害災害保険 に必ず加入しておくこと。 交通費等は自弁。 お遍路の体感的なコミュニケーションデザインへの体験に関心のある院生の受講を歓迎する。学部後期の学生も受講できる。経験を重視するため受講人数に限りがあり、第1回での動機等の対話を考慮して選考し、即日通知する。決定者はフェリーも含めた移動手段の早急に確保すること。				
教科書・教材	・ 講義において別途指示する。				

参考文献	ブログ：森栗茂一のコミュニティ・コミュニケーション 砂の器（監督野村芳太郎） 中山和久『巡礼・遍路がわかる事典』日本実業出版、1575円 辰濃和男『四国遍路』岩波書店 司馬遼太郎『空海の風景』
成績評価	授業への参加50%、授業における発言など20%、ワークショップ、カフェの参加と発言30%
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり、特別な配慮を必要とする学生は初回授業のガイダンス後に申し出ること。 ・ディスカッションと活動を中心に授業を進めるので、受講者の積極的な参加・体感と現地でのふりかえりにおける発言、事後のワークショップへの参加を期待する。 ・本授業は、霊場をまわりますが、宗教行為を意図しませんし、強要をしません。しかし、文化様式としての読経などの行為をプレゼンすることはありますし、参加も拒否するものではありません。弘法大師の思想はユニバーサルであり、多様な考え、宗教を受け入れるものです。

・お遍路の意義＝人は限界まで歩くことによって、風土に出会い、人に出会う。一緒に歩く仲間と語り合う。犬は歩いても棒にしかあたらないが、人が歩けばコミュニケーションに当たる。そして、自分の内面、悩みを突破する力、可能性に出会う。己の能力、研究知識を活かして社会を変えていく力を得る。勇気を得る。社会人聴講を歓迎する。信仰・歴史ではなく、偶発的出会い、身体を使った異分野の仲間との語り合い、大自然と悠久の文化空間のなかで誘われるコミュニケーション力。

・お接待とは…道中、お遍路さんに対して地元の人々から果物や金品、善根宿などを無償で提供することがある。これに対し、遍路は持っているお札を「お接待」してくれた人に渡すことになっている。こうした文化のおかげで、昔は比較的貧しい人であってもお参りができたといわれる。今日でも四国西南部ではお接待の場ともなった「茶堂」が残っている。「お接待」の心は、接待することによって功德を積む、巡礼者もまた弘法大師のある種の化身であるという言い伝えからおこなわれる。仏教的には、無財七施に由来するが、無償の供与による交流は、コミュニケーションを増幅させ、施すほうも、施されるほうも、心理的に豊かな感覚を共有できる。

・四国遍路とは…四国八十八カ所を巡ることを特に遍路と言い、地元の人々は巡礼者をお遍路さんと呼ぶ。観光バスや車を利用する場合は6～10日前後、徒歩で巡ると40日前後かかると言われている。遍路は順番どおり打たなければならないわけではなく、各人の居住地や都合により、移動手段や日程行程などさまざまである。1度の旅で八十八カ所のすべてを回ることを「通し打ち」。何回かに分けて巡るのを「区切り打ち」という。

授業では、教授者が仮に先達となって、短い区切り内を体験してもらうようにする。順番どおり回るのを「順打ち」、逆に回るのを「逆打ち」という。遍路（巡礼者）は札所に到着すると、ある程度決められた手順に従い、本堂と大師堂に参り、般若心経など決められた読経を行い、その証として納札を納め、納経所で寺の名前や本尊の名前、本尊を表す梵字などを墨書し、納経印を押したものを納経帳に受領することができる。この、墨書し納経印を押したものは朱印・（御）宝印とも呼ばれ、寺の本尊を写したもので大切に扱わなければならない。宝印は納経帳以外にも掛け軸、白衣にも受領できる。八十八カ所全てを廻りきると「結願」となり、その後、高野山（奥の院）に詣でて「満願成就」とする。

※ 四国巡礼ともお遍路ともいう。四国の弘法大師ゆかりの88霊場をまわる。全行程1200km、一回で回っても良いし、何回かにわけても良い。逆に回ることもある。霊場を回ることも、途上で出会う人々や風景との交流、お接待という寄付や奉仕がある。お接待は、仏教の無罪の七施によるものであり、発心した遍路に対して、弘法大師と同様に、宿を貸し、食べ物を与え、休憩所を提供しようとする、四国の人々の行為である。